

透析医のひとりごと

「透析前の治療に意義有り」 猪野毛健男

昭和41年（1966）の春、日本泌尿器科学会の後、札幌への汽車の中で、北大辻一郎教授に呼び出された。「文部省科学研究費は、今年度から腎移植と決まった。直ちに北大泌尿器科腎移植班を決める。猪野毛他3名と新人2名をつける。」（この中には後で頼りになった中野、広田、須藤の諸君も入っていた）。否も諾もなし。日本には信頼できる文献なし。ただスタートルの一冊の単行本だけが頼りだった。

腎不全の患者をよい状態で移植するにはどうすればよいのか、すでに私たちは南式電気透析で急性腎不全患者2名を失っていた。私たちはあえて、当時、腹膜還流と呼ばれていた腹膜透析を選んだ。当時の腹膜還流は急性腎不全むきだった。クレアチニンとKは下がるがアルブミンもどんどん下がる。低アルブミン血症で2名を失った。

僕は断然、コルフの血液透析に切り替えた。金がない。100Lのプラスチックゴミ用タンクを買った。日立散水ポンプとポリバケツも買った。プラスチックに透析液を入れ、散水ポンプで真ん中に穴を開けたポリバケツに透析液を吹き上げ、バケツにコルフのコイルを入れ、コイルの周りにプラスチックスポンジですきまをふさいだ。血液ポンプはすでにあった実験用のものを使った。2万円で手づくりの透析機器はできた。

透析液はコルフのを薬剤部で作ってもらった。僕はどこに行っても頭を低くして頼んだ。薬剤部、手術部、看護部、麻酔科、細菌学教室、病院事務にも頼んだ。みんな無理を承知でOKしてくれた。

41年12月、我々が大型犬ではじめての実験透析をしていた。我々の実験を辻教授が見に来た。すべてが順調なのを見て、「明日はL子をやれ」。我々は仰天した。動物実験1例で臨床応用したことはない。生まれつき腎不全のL子は、やっと辻教授が維持してきて、18歳の今、余命数日であった。辻先生は賭けたのだ。

L子の透析は成功した。臨床にはもう一つ越えねばならぬ山があった。当時のコルフ透析器は血液充填量が1,200ccもあった。血液なしには続けられない。僕は1回目の成功の後すぐ日赤の血液部へ頼みに行った。「お願いします！ 輸血用の空瓶を透析ごとに5本ずつください。お願いします！」日赤は快く透析ごとに5本ずつ空瓶をくれた。その瓶に、ダイヤライザーに残った血液を1,000ccずつ冷蔵庫に保管した。L子はうまくいっていたのが、ある日心臓で亡くなった。

それから1年9カ月、北大の腎移植は鳴かず飛ばずだった。東大の日本第1例目の成功を横目に、つらい日が続いた。昭和43年（1968）9月、母をドナーとする腎移植が成功した。彼（レシピエント）は長寿を得、当時は腎移植者の最長生存者であった。執刀者はたまたま僕だった。

北大泌尿器科の目的の第一は腎移植であり、透析はその副産物であった。しかし僕も含め、透析を従とし

泌尿器科を主とする開業が多くなった。その点では透析の恩恵は十分受けている。

当時、僕は透析患者が日本でこんなに増えるとは思わなかった。腎移植はドナーを選ばなくなった。免疫抑制剤も進歩した。日本人独特の死生観も変りつつある（ドナーは living donor が主であるが）。ところが透析になる人はちっとも減っていない。これは臨床家が悪いのではない。基礎医学が追いつかないのである。しかし臨床家も保存期の治療にもう少しがんばるべきであろう。

いのけ医院（北海道）